



地球のいのちの営みと調和、融合して
共に生きるコミュニティづくりの情報を発信する

いのちの森通信



公益財団法人
いのちの森
文化財団



Vol. 33
2015.Mar

平成27年3月25日発行
編集 山下 薫

発行/ 公益財団法人いのちの森文化財団 〒380-0888長野市大字上ヶ屋2471番地2198 TEL 026-239-0010 FAX 026-239-0011
ホームページ <http://inochinomori.or.jp> Eメール zaidan@inochinomori.or.jp

——私たちがいのち輝く哲学の森の中を散歩することで何が起るのでしょうか。

金泰昌 日常の営みから解放されず。まずは心を澄まして森の女神のこつそりささやくような歌声に耳を傾けてみましょう。そこから種類の音響が聞こえ、色色の姿形が見えてくるはず。

木の葉の舞い散る 音が聞こえる
野の道の名も無き花の さゆらぎが
微笑んでいる
風に揺れる たんぽぽが
手を振っている
雨は喉を潤し
太陽は私の身体を暖める
空には澄んだ青空と
大地には豊かな作物
樹々の緑は 私心を癒してくれる

その時に
人の愛が見えてくる
自然の愛が見えてくる
月の光が愛だつた
太陽の光が愛だつた
風にさゆらぐ野の花が
自分を揺らしてきてくれた
いろんなものが 見えてくる
人の心が 見えてくる
花の心が 見えてくる
風の心が 見えてくる
内側の静けさに 気付いた時
大きな愛に
満たされていくことに気がきます
(塩澤みどり・未公開詩「頬に吹く風」から)

いのち輝く森の中を散歩していると、「大自然の愛に触れ…自分のことを忘れ…我が無くなった時 なんと多くの愛に満たされていくのだらう」と思え、「人の心」「花の心」そして到頭「風の心」までが見えてくるのです。何と素晴らしい森の中の散歩の賜物でしょうか。わたくし自身の個人的体感を率直に申し上げますと、「人の息吹」「花の息吹」

そして「風の息吹」が「め(目・眼)の角膜に響き共振現象が起る」ということではないかという気がします。

——そのような森の中で哲学散歩するとはどういうことなんでしょうか。

金泰昌 まず、いのちのあるがままの様子を改めて見詰めるということをやがて
ひと粒の種が 芽吹き
一本の 大樹となり
花を咲かせ
実を 成らせるように
あなたと私は
ひと粒に 秘めおかれ
た 永遠の生命
たとえ 千年の時を
経ようと
万年の時を 経ようと
ひと粒の種が 芽を出
すように
あなたと私は 時の実
を 結びゆく

自分の中の
神を 想っていないさ
何ひとつ 思いわずら
うことなく
天来のリズムに のっ
ていなさい
すべてはあるがままに
起り
すべてはあるがままに
成り行く
味わうべき生は
時の神秘を 讃えている
(塩澤みどり・未公開詩「ひと粒の種」から)

ひと粒の種に秘めおかれた永遠の生命が「千年の時を経ようと」「万年の時を経ようと」「ひと粒の種が芽を出す」という塩澤みどりさんの深い冥想から生まれた哲学詩は、どのような逆境や苦痛の真つただ中からも生き返る民衆の、根強い生命力をうたっています。

哲学散歩へのお誘い

～哲学は、常に新たな道を切り拓くために必要～



キム テイチャン
金 泰昌
(公共する哲学をともにする会)

——そうしますと、いのち輝く哲学の森での哲学散歩の最初の課題は何でしょうか。

金泰昌 それは「いのち」をきちんととらえることです。「いのち」という大和言葉は「息の力」ですから、「生命」というよりは生命力もしくは根源的の生命力のことです。
生命の「生」とは一人一人のいのち、そして「命」とは生を支えている、より根源的な生命力をいいます。それを「宇宙的生命力」と言い換えてもいいと思います。

「生」は、いずれ死によって切断され、その結末を迎えます。が、「命」は永遠に死なないので、一人一人の生と死は命から出て命に帰るだけのことです。

生きていく間に善いこと・美しいこと・真の心を成し遂げた生は、命の善と美と真を一層高め・強め・深め・活性化して命の進化向上に貢献します。しかし、生が善を為し、醜を行ない、真に反せば、命の悪と醜と偽を増やし、命を劣化させます。

ですから、「いのち輝く」とは、「活命新生」(命を活かして生を新たにすること)ということなのであります。しかも活命新生は、一人一人の活命新生で終わることはありません。他者と自己(自己と他者ではない)がともに・互いに・一緒に「活命新生」しあうことにならなければなりません。つまり、他者の命を活かすことが自己の命が活かされることに通じ、そのように他者と自己の生が互いに活かし・活かされる。わたくしはこの様相を「活命相生」と呼んでいます。そこに時間軸を加えると「活命連帯」と

なり、世界の開新に繋がるのです。これは最も重要な生命原理であり、そのことをともに互いに一緒に体認することが哲学散歩の初歩にして究極の課題であると言っています。

——先生はこれまで世界のいろんなところにみずから出かけて行かれて哲学散歩を直接体験・経験・証言をされ、その効果を確認されたのと伺っています。一番印象深かったのは、どの国のどこかの森での散歩だったのでしょうか。

金泰昌 それは何と言ってもドイツのシュバルツバルトの森ですね。いわゆる黒い森です。実際行って見ますと全然黒くありません。現代のドイツ人は森の中を歩くのが大好きです。ですからシュバルツバルト近辺のホテルとか民宿は、特に週末なんかは大変混みます。しかしドイツはどこへ行っても近くに森があるし、そこで散歩するのは大きな楽しみになります。落ち葉の絨毯を厚く広げたような森道を氣を緩めて足のおもむくままに身を運び、心を遊ばすと、究極の逍遙三昧境を味わうことができます。ドイツ人の学者や学生たちと散歩をしながら随分哲学対話を交わしました。

わたくし自身が個人的に出会って哲学対話を交わすなかでドイツ人から言われたことは、ドイツでは森の中を歩くことによつてドイツ的なもの、精神に接することができる、というのです。では日本人は日本の森の中を歩くことによつてどのような精神に接することができるのでしょうか。ドイツ的なもの、日本の森の中を置き換えて言うならば、いのちの森の中で感得できる精神とは、「日本のもの」「古のもの」「土着のもの」「自然なもの」「詩的なもの」「トトロ的なもの」なのであります。

アメリカにもカナダにもそしてスカンディナビアの国々にも美しい森は到處にあり。またアフリカやアジアにも立派な森林はあります。しかし、なぜか日常生活の延長線上では近づき難いところがある。気軽に散歩すると

イメージではなく、自然保護運動とか生態観察研究のような明確な目的的行為につながるという印象が強いと言えないでしょうか。

——基本的な質問で恐縮ですが、人はなぜ哲学が必要なのでしょう。人はなぜ哲学が必要なのでしょう。人はなぜ哲学が必要なのでしょう。

金泰昌 人間にとって哲学は、常に新たな道を切り拓くために必要なのです。習慣化されたり前例化されたりすることに拘束されてしまつては、常に新たな道を切り拓くということが生命にとって一番大切なことです。それを日常生活の中で実践してゆくために哲学が必要なのです。それを「一人」でやるのではなく、人とともに、自然とともに、他者とともに実行してゆくことが「公共する哲学をともにする」ということなのです。

そのことは次の詩によく表れています。

「あらたなみち」

おがわをわたって森へ
とうげをこえて村へ
きのうもゆき きょうもゆく
わたしのみち あらたなみち
たんぽぽがさき かささがとび
乙女がとおりすぎ かぜがたち
わたしのみちはいつもあらたなみち
きょうも…… あしたも……
おがわをわたって森へ
とうげをこえて村へ
(金泰昌 訳)

最後に、いのち輝く哲学の森で行われる哲学散歩から何が期待されますか。

金泰昌 (キム・テチャン) 一三四年、忠清北道出身。主な日本語著書に『共福の思想』(GEC出版、同新版)、『公共哲学』全二十巻(東京大学出版会)の編者。各巻の表題は1「公と私の思想史」2「公と私の社会科学」3「日本における公と私」4「欧米における公と私」5「国家と人間と公共性」6「経済からみた公私問題」7「中間集団が開く公共性」8「科学技術と公共性」9「地球環境と公共性」10「21世紀公共哲学の地平」。11、20巻は各々「自治」「法律」「都市」「リーダーシップ」「文化と芸術」「宗教」「知識人」「組織・経営」「健康・医療」「世代間関係」から「考える公共性」、『物語論』、『公共哲学を語る人間』(全五巻)、『公共哲学を語りあう』(ともに公共哲学する) (いずれも同出版会) ほか多数。



木々に囲まれたいのちの森の中庭

金泰昌 一言で「健康と幸福の森創りのための哲学対話・共働・開新」です。今、世界的に森林破壊が規模超速で進行・拡大しています。世界の森を知る多くの専門家たちは健康と幸福の森は地球上のどこにもなくなつてしまつたのではないかと嘆いています。しかしいのちの森では、真の健康と幸福そしてそれを支える循環型農業による自然食物の生産と流通と配分に汗と志をささげてこられました。このようなことは世界でも本場に稀有なことです。一緒に大切にはぐくみつつつづけたいものです。

この森の中で推進されている多様なプログラムを通して、本当の健康と幸福の森にしていくための新しい哲学道を、一緒に共働創発していければと期待しています。

東アジアにおける諸課題を共に学びあえる関係の構築を目指して

昨年10月、公共する哲学をともにする会の金泰昌(キム・テチャン)先生と、韓国より円光大学教授の朴孟洙(パク・メンソ)先生を団長とする一行が『いのちの森文化財団』を訪れ、二日間にわたつて東アジアにおける諸課題と、現代に於いて私たち自身が寄つて立つべき哲学的基盤について意見交換を行った。

会のリードを金先生が行い、私たちはその深淵なる内容に驚嘆しながらも、今だからこそ東アジアにおける人々の意識の変容と連帯を図つていかなければならぬという思いに駆られつつ次なる出合いを願ひ散会した。

ハンサリム宣言を読む



塩澤 研一

(いのちの森文化財団 副代表理事)

その後、金先生からはその時の感想を含めて「宇宙生命」についての文章を寄せてくださり、前号の通信でその文章を掲載させて頂いた。

今年はこの時の内容をより深化するため「哲学散歩」として3回にわたり「いのち」をテーマに共に語り合う企画を財団として行うことになった。未来共創新聞の山本編集長の応援を得て5月から始まるこの「哲学散歩」にぜひご参加頂きたい。

さて、私たちは最も近い韓国の歴史や文化について実はあまりにも知らなさすぎるのではないかと、中国は日本の文化の大半の源

であるにも関わらず、戦後はほとんど学ぶ機会を失つてしまった。5000年の歴史を持つ両国から日本は文化芸術をはじめ様々な技術や法、宗教、学問、制度等々を学んできたにも関わらず疎遠になつて久しい。混迷を深めているこの時代だからこそ、様々な恩恵を超えて共に学びあう関係を構築していかなければならないのではと思ふ。

民衆の中に生き続けた実践運動―「東学」

未来共創新聞(※)では韓国における「東学」について幾たびか紹介頂いているが、500年続いた李王朝時代に、今から150年ほど前と言え日本本という幕末になるのであるうか、朝鮮に水雲崔濟愚(チェジュウ)によつて民衆哲学実践運動として「東学」が生まれたという。崔濟愚は当時の政治の腐敗、宗教の墮落、社会の暗黒、精神の麻痺にたいして民衆の活命運

帯を提唱し、そのあとを継いだ海月崔時亨(チェシヒョン)は30年の民衆覚醒の地下運動を続けたという。この二人は、いづれも李朝により処刑されてしまつたが、その思いは民衆の中に生き続け導きの糸となり生命の水となり、彼らの霊性的・精神的な団結が東学として生き続けてきたといわれている。

そして25年前にこの思いは「ハンサリム宣言」として韓国に再生した。この運動は次の時代を作る大きな哲学的な流れとして東アジ

アに静かな胎動を起しているといえるだろう。

昨秋、朴孟洙先生が訪れることを知り、25年前に出版された「ハンサリム宣言」を読む機会が与えられた。ハンサリムを一言で表すのはあまりにも奥が深い、あえて言えば「いのちを生かす」生命と平和の運動といえるだろう。

産業文明から新しい文明の在り方を模索して―ハンサリム宣言から受けた衝撃

20世紀後半は資本主義と社会主義ないしは共産主義のぶつかり合の時代であり、いわば唯物論的なものが見方が横行した時代でもあった。資本主義の矛盾を乗り越えるものとして共産主義がこの時代に大いにもはやされた。とりわけ第二次世界大戦後の日本に於いては救世主的な思想として一世を風靡したが、その思いとは逆に殺生の文明へと舵を切つてしまつたのは戦後世代の問題として深く反省しなければならぬ。

なぜ私たちは産業文明の中に埋没し、純粋な青雲の志から離れていつてしまったのであろうか。自己を深めることを怠つてきたツケがむしやりに突き進んだモノ的産業文明は『生命の危機』と『存在の危機』を生んでしまつた。日本においてそれは密教ブームとスピリチュアルブームへと逃避し、結果オウムや様々なオカルトへと変質してしまひ、まさしく産業文明とは真逆だが同質の殺生文明を生んでしまつた。私たちは悶々としながら新しい文明の在り方を模索しつつも、その方向すら見出せないでいた。

私はこの「ハンサリム宣言―殺生の文明からサリムの文明へ」と題した小誌と出会う強い衝撃を受けた。もはやイデオロギーによ

る世界観は終焉を迎え、生命に対する宇宙的覚醒活動へと人類は進化していかなければならないことを提示されている。

私たちは今から35年前に人生への大きな挫折感をもつて飯綱山の麓に小さな庵を結び、自己の内面を深める言わば隠遁生活に近い10年を過ごした。そしてもしかしたらもう一度何かできるのかもしれない、という淡い思いをもつて「水輪」というスペースを開設した。最初に開催したのが「宇宙生命大学」という講座であった。おもしろい密教ブームであり、参加者はいわゆる精神世界に対する興味を持った人々が多かつたが、私たちは「意識の大学構想」として、『いのちの営みを根底にした生かすまでの共に生きあえる生活の在り方』を模索していた。まさしくハンサリム宣言が出されたのと時を同じくして同じ方向性をもつた流れが韓国、日本の中で産声を上げたことに其時性を強く感ずる。

公益財団法人いのちの森文化財団 新施設
森のいずみ・森のことり
竣工祝賀会

日時 2015年5月16日(土) 午後1時30分～
会場 森のいずみ及びグリーンオアシスホール(予定)
会費 5,000円(夕食込 ※宿泊の方は+3,500円)
受付 正午～ 館内見学
次第 <竣工式 午後1時30分～午後3時30分>
<竣工祝賀会 午後5時～午後7時30分>

- ・いのちの森文化財団代表理事 挨拶
- ・工事関係会社代表 挨拶
- ・ご来賓祝辞
- ・乾杯、祝宴、参加者紹介
- ・梵天・和太鼓、小島千絵子・気舞、他アーティストによる演奏演舞など
- ・閉会の言葉(午後7時30分閉会)

申込み 4/20までに財団事務局へお願い申し上げます

東日本大震災被災地支援先より
お手紙を頂きました

いのちの森文化財団のみな様

いつも子どもたちのために、安全なお野菜のご支援をありがとうございます。

冬場のお野菜のない時期に、毎週美味しい大根をお贈りくださいます。ありがとうございます。先日、食育の一環で、2歳児クラスと1歳児クラスでは、贈っていた大根を自分たちで箱から出して、大きさを確認しました。また、1歳児クラスでは綺麗に洗う作業も手伝いました。やはり子どもたちは、実際に関わると、「これは(洗っている大根)いつ食べる?」と気になり、調理されたものを目の前に出されて食べるだけでなく、実際に食材に関わることの大切さを再確認しました。

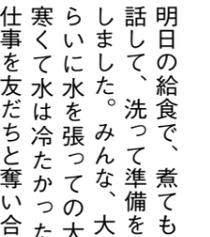
皆様のお働きと、ご健康が守られますようお祈り申し上げます。感謝して。

2015年3月9日
原町聖愛保育園
園長 遠藤美保子

明日の給食で、煮てもらうことを話して、洗って準備をすることにしました。みんな、大張り切り! 洗い水を張つた大根洗い桶は、寒くて水は冷たかつたのですが、仕事を友だちと奪い合う程、喜んで洗つていました。

明日の給食は、きつとかわりしていただきますよ。

誰か騒いだり遊んだりしないで、ジーンと見ながら先生の話を聞いていました。



「日本の現状と将来を思う」いのちの尊さとその発揮への道

「どうしたら、人間すべて持つて生まれた尊いのちをどうすれば申し分なく発揮出来るか？」その道をシッカリつかむには、そして根本はどうしても教育ということになりそうです。

まず、胎教から小学校までの幼児教育が大切な基本となります。そのためには、父親、母親のための「親学・子育て学」が中学・高校の間に設けられたらいいなあ、と思います。そして、そのためには、幸せな結婚のために「真の愛とは？」の学びがぜひ必要だと思います。

中学高校から大学にかけては、「自分はどういう人生を生きたいか？」を考え始める時期です。そのためにはまず、自分独自の個性を発見するために、いろんな分野の勉強や、体育や芸術などとのいろいろな出会い、特に子どもとの個性を見抜くような先生との出会いがぜひ必要だと思います。

「自分の置かれている環境がどんなであり、その中でどんな問題が渦巻いているか」「その問題に自分はどのように応えているか？」を深く見究めるための学びです。例えば、「環境破壊の問題について、それをもたらしている政治経済のありかた、そのような世界の中の日本の現況」「その中で自分の役割は何か？」を深く見究めるのを助けるような教育が必要だと思います。

若者は、ささやかなマイホーム型の幸せなどより、「世界の中の自分の役割」を見つけた時には、自分でも驚くような熱いいのちが湧き上がり、我にもあらぬ行動を開始します。そのような事例を幾つも見てきました。そして、その度に「若者たちは素晴らしいのちを秘めている」と感動しました。

そして、そのような出会いの続いてきた人生を、本当に有り難く思っております。

成人し、功成り名遂げた人も、もしそれが、ただ個人の富・名誉・権力・快楽だけを目標にしてきたものであるなら、本当に幸せでしょうか。先日テレビのある番組を見ていたら、評論家の西部邁さんだつたかと思いますが、アメリカのある大金持ちが、ある政治家たちの集まりで「私らのこの貪欲(greedy)を何とかしてくれ」と訴えていた、と言われまし

た。「自分の貪欲さが自分でやりきれなくなつた」と。これは人間の深い心の性質だと思えます。「人間の真実、本当の願いは、生きがいは、何であるか」これは本人の深い心が知っているはずなので、どうすればそれがめざめるか？

「人間の深い自己理解、本当の自分の眼覚め、真の価値観の樹立」その道の探求と実践に残りたいのちを少しでも捧げていきたい願っております。

連載 日本の現状と将来を思う

いのちの尊さとその発揮への道

第一回



馬場 俊彦 (名城大学名誉教授)

されるのは、児童虐待、無差別殺人、いじめ、不登校、家庭内暴力の格差拡大の中で子育てに苦しむ母子家庭など、心が痛みます。そんな中で最近素晴らしい事例をある新聞記事で見出し、是非ご紹介したいと思えます。

「どうせ俺なんて、バイトもクビで、少年院にぶち込まれるんやろ」2014年9月、ある地方の鑑別所。少年19がそ

う吐き捨てるように言う。弁護士は思いがけないことを言った。「普通ならそうなるだろうね、でもそうならないかも」少年のアルバイト先のガソリンスタンドの店長(7)が少年審判の審判。言い渡されたのは、少年院送致ではなく保護観察処分だつた。裁判官がそう述べると、少年は大粒の涙を流した。

嘆願書には、店長の直筆でこう記されていた。「額に汗して働き、お客様にありがとう、会社にとつて不可欠、必要な存在です。必ず更生できると信じています。少年の両親は3歳の時離婚、祖母(69)の古い一軒家で、介護士の母(38)と妹(13)と4人で暮らしていた。小学校3年のころから母は次第に家を空けることが多くなり、6年の時、「しばらく家に戻らんから」と言い残して家を出た。数日後母から電話があり、「もう一緒に住めない」と一方的に告げられた。「捨てられたんだ。俺たちのことなんて、どうでもいいんだ」。胸が張り裂けそうになつた

ある少年の立ち上がり記事

私馬場は今82歳半になります。日本の現状と将来を思い、何か胸熱くなる思いで日々、暮らしています。みなさん、本当に尊い命を持って生まれて来られたのに、毎日のようにマスコミで報道

が、隣で泣き出した妹を見て、「泣かんまい、泣かんまい」と必死で涙をこらえた。母の収入が途絶え、祖母がマンション管理人のアルバイトと年金で生活を支えた。もともと豊かとはいえなかった生活はさらに厳しくなつた。夕食はご飯とみそ汁におかずは一品だけ。外食もしなくなり、みんなが着ている洋服を欲しいとねだつても、「甘えるな」としかられた。「おれには親もいなければ、金もない。何不自由なく暮らす同級生がねたましかなかった。憂さをほらすように万引きやけんかをした。高校にあがる頃、「このままじゃいけない」と思い、ガソリンスタンドでアルバイトを始めたが、人との接し方が分らなかつた。「ありがとう」というお客に返事をしないでいると、店長に「礼儀を尽くせ」としかり飛ばされた。最初は「うるさい」と思っていたが、「常識を覚えろ」と繰り返す店長に、いつしか「父親を感じるようになっていった。仕事にもやりがいを感じ始めた昨年8月。ささいなことから口論になつた上級生をなぐり、鑑別所に入った。

店長の愛と信

嘆願書を出した店長は、中学の時父親を亡くしていた。家の仕事を手伝うために高校を諦め、近所の知人からお米や野菜を分けてもらつて暮らした。店で働きた少年が親に見放され、貧しさの中にあることを知り、かつての自分の姿と重ねてみていた。万引きをした過去も知っていたが、少年が仕事で、「人の役に立つて、気持ちいいですね」と言つて浮かべた笑顔は本物だと感じ、「この子に信じて」と思つたと言ふ。少年は翌日からバイトに出た。高校は辞め、無遅刻無欠勤で働いている。処分の後、給料を5万円ずつため、けがを負わせた上級生への治療費の支払いも終えた。少年は「信じてくれた店長に恩返しするために、自分と家族に責任が持

てる大人になると誓う。店長は隣に座る少年の肩を抱きながら語つた。「もし、また道を踏み外しても、私はこの子を信じる。そんな大人が一人でも多くなれば救われる子どもも増えるんじゃないかな」。(読売新聞27年2月19日よ)

私はこの記事から(1)少年の非行の原因、(2)彼を立ち直らせたもの、(3)彼に秘められたいのちの素晴らしさについて、学びました。(1)少年の非行の原因はまず親の離婚、そして母に捨てられたこと、貧しさ。万引きの原因は「貧しさ」もあつたでしょうが、少年は愛に飢えていた。「少年少女が物を盗むのは、愛を盗むのである」と、非行少年の立ち上がりに生涯をささげたA.S.ニールは言います。私も高校生時代、知り合いの中学3年の少年が友達のスバイクシューズを盗んだという事件に驚きました。ニコニコとおとなしい少年だつたので、母親は亡くなつていて、父は寝たきり、兄は遠くの療養所に入院中、遠くの町に通勤していた姉と3人で、母の兄で医師の屋敷の離れに住ませてもらつていました。母屋の伯父の子どもたちや、恵まれた級友たちの幸せをうな姿をどんな気持ちで見ているでしょう。「僕だつて」という潜在意識が盗みを働かせた。(「ほんとうの自分」下巻108頁に詳しく書きました)。また殴るなどの暴力行為も、ニールは、「ある非行少年が法廷に立たされた時、得意げに大人たちを見まわした」ことから、「無視された自分の存在を認めてほしい」のが動機だと説きます。しかし隣で泣きじやくる妹を見て「泣くまい、泣くまい」と涙をこらえる兄としての思い・愛、そして「このままじゃいけない」と少年はガソリンスタンドで働きはじ

めた「本物の人生をいききたい」思。この二つは、どんな人の中にも秘められた素晴らしいいのちの働きだと思えます。(2)このいのちの働きを助けたのが、店長さんとの出会いです。自分自身貧しさの寂しさの中から近所の人たちの愛に支えられて立ちあがった店長は、少年を叱りながら教えた。少年は反発を超えて店長に「父親」を感じるようになった。そして、「人の役に立つて、気持ちいいですね」と笑顔で言うまでになつた。これこそ人間としての真の生きがい：彼はそれを感じるようになった。しかし、また暴行を繰り返してしまつた。そして少年院送りになりかけた時の店長の嘆願書。いろんな書き方があるだろうけれど、表面の非行にもかかわらず「額に汗して働き、お客様にありがとう」と長所を褒め「会社にとって必要不可欠」とその存在の価値を断定し、「必ず更生できる」と信じる言葉。少年は大粒の涙を流した。生まれて初めて褒められ、存在を認められ、その上、将来を信じぬかれる経験。

世界平和への道

さらに店長の「もしまた道を踏み外しても、私はこの子を信じる」の一言がすごい。「どんなに失敗を繰り返しても、見捨てず愛し抜く」ということでしょうか。こまごまで信じられたら、人間は命がけでその信頼に応えようとする。いや「命がけ」というより、その「すべてを許し信じる愛」に抱かれる大安心の中で、持つて生まれた生命力が生き返り、大活躍を始めるでしょう。ここでいう愛・信は、「愛してなのに、信じていたのに裏切られた」などという自己中心・条件付きの「愛・信」とは全く次元が違う、相手中心の無条件の愛・信です。人間の心の構造は地球の構造に似ていて、我欲と自

己防衛・警戒心で冷え固まつた表層の地殻の奥底に、隙さえあれば地殻を突き破り噴き出しようとするように熱くたぎる真心、無私の愛・信・互いに通い合いたく、たまらない真心が秘められている。店長の真心の愛と信が少年の真心を呼び覚まし、それに全力を持つてこたえようと、それまで深く秘められていたいのちの力が噴出し始めた。これは(3)です。

店長さんはさらに、「そんな大人が一人でも多くなれば、救われる子どもも増えるんじゃないかなあ」と言われます。誰よりもまづこの少年自身が「そんな大人」になるでしょう。そして大人になつたこの少年に救われた少年が、また：というふう「深層の愛」の波紋は広がっていくでしょう。この少年に起こつたことは、一見街の片隅のささやかな出来事のように思えますが、実は世の中に大きく広がっていく力を秘めている。そしてこの広がりがこそ世界平和への真の道であると思われま。今世の中を表面的に見れば、いじめ、無差別殺人、自殺：から「イスラム国」の「凶暴」にいたるまで恐ろしい姿ですが、でも、人間はすべて、たとえ表面がどんなに荒れていても深層にはこの素晴らしい命を秘めているならば、人類には大きな希望があります。この「人間に秘められたいのちの素晴らしさ」と「その発揮への道」をいろいろ実例を手掛かりに、このシリーズでいよいよ広く深く学び続けていきたいと思います。

ばはとしひこ 1932年岐阜県に生まれる。1951年東京大学哲学科に入学。出世競争に驚き文学部哲学科に転進。修士修了するも博士課程不合格。前途に絶望。ある夜自殺寸前から立ち上がり、以後不眠症と人生の展開を経験。1966年名城大学就職。理工学部で英語・哲学担当。同大学大学院総合学術研究科・経営学研究科、また愛知医科大学看護学部で人間学を講義。現在名城大学名誉教授。

